



開館6周年記念特別展 「広重を生んだ画派 歌川派の時代展」後期

料理の世界に「大名おろし」という言葉があります。魚を三枚におろすとき、中骨にたくさん身を残してさばくことをいいます。ぜいたくな方法なので、この名があるのでしょうか。しかし殿様といえど我々庶民が想像するほど優雅なものではなかったようで…。

そのあたりの事情を物語る「天童広重」の作品をご紹介します。「天童広重」

とは、広重が出羽国（現山形県）の天童藩織田家から依頼を受けて制作した肉筆画（約200幅ほどあったといわれる）のこと。この天童藩、だいぶお金に困っていました。そのため近隣の名主や商人たちから御用金という名の大量の借金をしたのです。ところがそれだけの大金を返却するあてがない。そこで、藩士と交流のあった広重に描かせた絵を与えることで借金の帳消しをはかり、更に今後10年にわたる御用金の約束を取り付けたのです。広重の肉筆とはいえ、当時の人々からすれば実質上の借金の踏み倒しという事態になってしまったわけです。特に、本作のような三幅対の「天童広重」は、高額の御用金を上納した人々に授けられたと考えられています。商人たちの苦虫



歌川広重「東都王子不動之瀧 王子音無川 王子滝之川」絹本着色 三幅対
嘉永（1848-54）前期 当館蔵

をかみつぶした顔が目には浮かぶようですが、我々は彼らの苦衷をよそに、心おきなくこの傑作を鑑賞することとしましょう。

※この作品は開館6周年記念特別展「広重を生んだ画派 歌川派の時代展」後期（12月3日まで）に出品されています。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 津田 卓子

町民無料開放のお知らせ

11月18日（土）の午後5時30分から午後8時まで、那珂川町民の皆さまを美術館へご招待します。無料で本展がご覧いただけます。ぜひこの機会にご家族そろって夜の美術館をお楽しみください。

白鳥の詩が聞える

10月14日～25日まで、広重美術館ギャラリーで開催された和泉一雄写真展「白鳥の詩が聞える」。

和泉さん（小川）は北海道などに行って白鳥を撮り続けて15年。今回、今までの集大成として宇都宮市、那珂川町の2カ所で写真展を開催しました。

そのうちの2点をご紹介します。



連 翔

ミニ ギャラリー



幻 想